

100 周年記念事業についての意見・アイデア (高 29 回生より)

(コンセプトについて)

神撫臺 77 号掲載案に賛同します。ベーシックで普遍的なコンセプトだと思います。

ただ、100 周年という節目なので、Ad astra や智・徳・体等神撫教育を伝え続けようとする中身として

「記念となること」：これまでの 100 年を振り返り、学ぶことができること

「発展を促すこと」：卒業後も含めて長田生が育つフィールドを創ること

「絆を深めること」：卒業生相互の認知・理解の機会を増やし、力を合わせていくこと

などについて、100 周年を「変曲点」と位置付ける思いも込めてほしいと思います。

例えば、副題の「神撫教育が伝え続けるもの」を「これから私たちが伝え続けていく神撫教育」と主体表現にすることで、100 周年を節目に高まる加速や変革への期待と参加感を示せるように思います。

(記念事業の中身について)

今回の神撫臺記事では触れていませんが、以下は主として、最もお金のかかる中心事業である「会館建設」についての意見です。(※はその他の事業についての意見)

1)会館は必須ではない。無くてもいいもの。だからこそ 100 周年を節目に建設にチャレンジしたい。会館ができれば、上記コンセプトを具現する「新たな場」として大いに活用できるだろう。必要性を感じないという反対意見を聞くが、必要なものは周年事業ではなく都度実現していくほうがいいのか？

2)立地は諸般の事情で校内になりそうとのこと。長田高校は長田商業、星雲と同居するユニークな学校。24×7 みたいな学校。彼らには夜間や休日にキャンパスを運用する地盤・ノウハウがあるので、校内建設となれば、神撫会のみならず 2 校を含めて卒業生が気楽に母校の会館を訪問できるとすばらしい。

3)東京支部理事に回覧された趣意書等の資料によると、会館建設についての議論は長年、多岐にわたって行われてきたようだが、一般会員には知る術がない。「受け継いできた悲願とは何か？」や「今後公開可能な会館建設関連情報」はホームページ等で見える化してほしい。

4)同じ仕様の建物であれば、建設コストを最小化するようにお願いします。建設費高騰の折、2020 年竣工は見送るべきと考えます。逆に、夜間・休日も含めて、建設時の安全・騒音対策には一定のコストをかけて工事関係者に厳しく注文をつけてほしい。3 校生徒の勉学が危ぶまれるようなことのないよう。

5)建設後の維持管理費等で学校や在校生に負担がかかるようなことのないよう、神撫会も継続的に金銭的支援ができるようにしたい。長田高校だけのために投入される県税が多くなると在校生や PTA も肩身

が狭い。少しでも県(高校)の負担を少なくしていくことは建物を作った卒業生の務めだと思う。そのためには、会館を OB が利用する機会を増やすこと、会館利用で収支差額を出していくようなイベントを企画実行していくこと、なども重要。

※会館建設以外の「記念式典」、「記念誌発行」等にも賛成です。

※東京支部総会もそうですが、回生の同窓会やクラブの OB 会など関係団体で「100 周年事業協賛イベント」等を進めていけば、参加意識の高揚に加え、事業基金の寄附集めにもつながると思います。

(記念会館活用アイデア)

1)シニア再スクール(老若男女共学制)の開講

主として仕事・家事リタイア後の卒業生が母校に再集結。記念会館で授業を受ける。数週間の毎日とか、数か月間の週 1 日とか定期的な「通学」を再体験する。講師や運営もリタイア世代の卒業生が担当。若い世代が部分参加してもよい。いつまでも勉強したいと思う卒業生は多いだろう。もう一度母校の学生に戻る機会を得たら、いきいきと若返るだろう。記念会館が、人生の節目にきっかけを創る場所、すばらしい思い出の場所、になる。有料化して、建物維持費に充ててもいい。

2)永久不滅寄せ書き

卒業時や節目の年に、回生、クラブなどで寄せ書きを作成し、電子化して記念会館に保存。リクエストすれば、同窓会、OB 会などの機会に記念会館の壁等に投影できる。全員参加アーカイブとなる。

※普段は、まず在校生が有効活用してくれることが大事。長田商業、星雲にも同様に使ってもらえることがあれば、どんどん活用いただければと思います。

※校内ならば、卒業生が使用する際に、お酒やたばこなど制限があるのは仕方がないと思います。懇親会等は OB が集しやすい商業施設でやることで OK だと思います。

(寄附金について)

今後も数年間にわたる募金になるので、高額/単発の寄附と少額/多数/頻発の寄附を併用するのがいいと思います。

- － 1 口の額面を低く(極端に言うと 1 円単位に)して、いつでも何度でも寄附できるようにする。
- － 協賛イベント等と連携し、寄附対象者を増やすとともに、繰り返し寄附のチャンスが自然に増えるようにする。

以上